

我が国のことわざ・慣用句・故事成語の指導について —平成 27 年度国語教科書会社 5 社の比較検討を通して—

宮城 信夫*・石井 勉**

Teaching Japanese Proverbs, Idioms, Fables, and Sayings: Through Comparative Examination of Five Japanese Textbook Companies in Fiscal Year 2015

Nobuo MIYAGI, Tsutomu ISHII

要旨 我が国の国語教科書でことわざ・慣用句・故事成語がどのように扱われ、どのような指導を意図しているのかを 5 社の教科書会社の傾向を分析し明らかにした。そこにはいくつかの問題点が散見された。さらにことわざ・慣用句の内在する問題点もあり、この指導の難しさを露呈するものとなった。とくに『学習指導要領解』に例示された辞に教科書会社が強く影響されていることが分かった。そうした問題点を把握し、指導に当たる際に言語文化の視点から質、量とも絶対的に不足している教材群の中で教師の日常的な指導の必要性を指摘した。

キーワード：リテラシー ことわざ・慣用句・故事成語・教科

1 はじめに

平成 26 年度の全国学力テストにおいて、沖縄県は飛躍的な成績を取めることができた。その反面、行き過ぎた補習指導やプリント学習などの問題点も指摘されている。一定の成果を取めた一方で、検証・改善されなければいけない課題も山積している。その問題点については、行政、教育現場、地域において、学校教育の本質を問い直す中で明らかにされていかなければならないであろう。

ところで、小学校国語 A では、「故事成語の意

味と使い方を理解する」の 2 問の正答率がそれぞれ 56%、50.1% と非常に大きな課題を有していることがわかる。ほかの正答率が漢字を除いてほぼ 7 割を超えていることから（漢字の正答率は 59.4%）、この数字のもつ課題の大きさを感じることができる。各都道府県が学力問題に力を入れている現状にかかわらず、我が国の児童は、故事成語に関しての知識は貧弱なのである。いうまでもなく故事成語、慣用句、ことわざなどは、古来から息づいてきた言語文化、言語遺産である。これらの指導をさらに充実させる必要性を、先の数字は物語っている。そこで本稿では、我が国の義務教育段階で使用されている、国語科教科書 5 社の傾向と特色を調べ、どのような問題点があるのかを明らかにし、指導の改善につなげていきたい。

*みやぎ のぶお 沖縄県宜野湾市教育委員会

**いしい つとむ 文教大学教育学部学校教育課程数学専修

2 学習指導要領と各教科書会社の傾向

(1) 学習指導要領での位置づけ

学習指導要領では、小学校においては、第3学年及び第4学年の「伝統的な言語文化に関する事項」のなかで「(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句, 故事成語等の意味を知り, 使うこと。」と記されている。さらに『小学校学習指導要領解説 国語編』のなかで「(イ) は、長く使われてきたことわざや慣用句, 故事成語等の意味を知り, 日常生活でも使うようにすることに関する事項である」と位置づけ、「ことわざ」は、生活経験などにおいてありがちなことを述べたり, 教訓をのべたりするものである。例えば「住めば都」, 「犬も歩けば棒に当たる」, 「急がば回れ」, 「石の上にも三年」などがある。「慣用句」は、「道草を食う」, 「油を売る」などのように、二つ以上の語が結びついて元の意味とは違った特定の意味をあらわすものである。「故事成語」は「推敲」「矛盾」, 「五十歩百歩」などのように中国の故事に由来する熟語である。(略) 言語生活を豊かにするために、これらの言葉の意味を知り, 実際の言語生活で用いるようにさせることが大切である」としている。指導法については「辞書を利用して調べる方法を理解し, 調べる習慣を付けること」と関連させ, 言葉に対する児童書なども活用させるようにする。言葉の意味を調べることに加え, 短文作りをしたり, 本や文章を読んでその中に使われているものを探したりすることなどを通して, 自分の表現に用いるようにすることも必要である。」と結んでいる。すなわち, 児童が主体的に調べる活動を通して故事成語の持つ意味や成り立ちなどを発見し, 短文作りなどの言語操作を行い, 内在する意味と使用法を獲得していくことを目指している。そうした学習によって, 児童の日常生活における言語文化をより豊かなものにしていくことをねらっているのである。

(2) 各教科書会社の扱い

では次に, 各教科書会社では, 故事成語等はそのように扱われているのであろうか。現在, 国語教科書は光村図書(以下光村), 東京書籍(以下東書), 教育出版(以下教出), 三省堂, 学校図書(以下学図)の5社がある。半田(2012)によると, 2011年度の採択状況は, 光村が61.6%で, 以下東書が20.7%, 教出が14.4%, 三省堂が6.5%, 学図が3.1%となっている。この数字だけみると, 光村の故事成語に対する姿勢や教材が, 比較的児童の学習に影響を与えているだろうことが推測される。現在, 小学校では, 平成27年度教科書が使用され, 中学校では次年度以降使用する見本が配布されている。小学校, 中学校ともに改訂された教科書が出そろったのである。その教科書の分析を通して今後の各教科書会社の傾向と指導法について考察していきたい。

①三省堂

まず一つの学年のみで扱っているものが三省堂である。4学年で「故事成語の物語」という補助単元を組んでいる。見開き2ページで, 故事成語の解説的な文章量も多い。「漁夫の利」だけで, イラスト入りの見開き1ページの解説となり, さらに「矛盾」「五十歩百歩」「推敲」を調べる学習を促している。その後, 辞典での調べ学習が組織され, 読み物の紹介となっている。言葉の解説という点では他の教科書に比しても充実しているといえる。ただ出ている故事成語が4個であり, 量としては少ない。その分詳しい解説で児童の興味関心を引き, 主体的な調べ学習の素地を作ろうとしている姿勢が見える。学年の一時期で扱われているため, その後の学習活動の工夫, 継続が教師側に求められる。

「漁夫の利」「矛盾」「五十歩百歩」「推敲」

表1 三省堂で扱われている故事成語一覧

中学校の教科書では、「故事成語－矛盾」というタイトルで、故事の説明と書き下し文で説明している。「古典に学ぶ」という大単元があり、竹取物語などとともに並べられている。内容理解よりも「漢文の読み方」というタイトルがあるように漢文の白文や訓読文、書き下し文の知識を得るために、「矛盾」が扱われている。

②光村図書

一方光村は3年生の下の教科書で「本で調べて、ほうこくする文章を書こう」という大単元を設定し、そのなかで「ことわざについて調べよう」という調べ学習を取り入れている。ここでは見開き3ページ半と量をさき、ことわざについての知識と調べた結果を文章にまとめるという2つのねらいが位置づけられている。

内容では、「同じとくちょうをもつことわざを集めて、意味を調べよう」として「出てくるものに着目する」「表現のとくちょうに着目する」「意味に着目する」という3つの観点を示して、学習の方向性を示している。量的にも内容的にも十分な学習が期待できる。故事成語は、下巻のふろくの部分で見開き半ページの扱いである。調べ学習の発展という位置付けだと思われるが、量的にやや少なさを感じる。一方4年生では、下の教科書で「言葉」というコラム的な項目の、「慣用句」という見開き1ページの扱いとなっている。単なる紹介としての慣用句のあとに、文中の穴埋め問題が続く。21個の慣用句が見開き1ページで扱われているため、非常に密度の高い印象を受ける。

ことわざ (3 学年下)

「急がば回れ」「わらう門には福来たる」「おびに短したすきに長し」「頭かくしてしりかくさず」「さるも木から落ちる」「犬も歩けばほうに当たる」「所かわれば品かわる」「ねこの手もかりたい」「やなぎの下にいつもどじょうはいない」「わかいときの苦勞は買ってませよ」「わが身をつねって人のいたさを知れ」

「ねこにこばん」

故事成語 (3 学年下)

「蛇足」「五十歩百歩」「漁夫の利」

慣用句 (4 学年下)

「火花を散らす」「頭をひねる」「心がおどる」「借りてきたねこ」「虫の知らせ」「うり二つ」「実を結ぶ」「エンジンがかかる」「メスを入れる」「馬が合う」「竹をわった」「手に取る」「水を打った」「きつねにつままれた」があり、短文作りとして「むねを打つ」「息を殺す」「えりを正す」「油を売る」「型にはまる」「世話を焼く」「なみだをのむ」

表2 光村で扱われていることわざ・故事成語・慣用句一覧

中学校の教科書では、3学年の教科書に「慣用句・ことわざ・故事成語」として、正面から言葉の知識として扱っている。一つの単元をくんでいるのである。慣用句は「二つ以上の言葉が結びついて、もともとの言葉の意味とは別の意味を表すものを、慣用句という」と定義づけ、「体や心」「衣食住」「動植物」それぞれに関係する慣用句を紹介している。又ことわざでは「古くから世間でいいならわされてきた、生活上の知恵や教訓が込められた言葉」と定義し、「猿も木から落ちる」「転ばぬ先の杖」が紹介されている。故事成語は「中国の古典に由来し、歴史的な事実や言い伝えを基に作られた言葉」として「背水の陣」や「温故知新」を2行程度で紹介している。光村の場合は、「慣用句やことわざなどの誤用に注意しよう」というコラムを設けて、「気が置けない」「情けは人のためならず」を掲載している。言葉についての生徒の関心を高めようとしているが、わずか2ページの中に詰め込んでいるので、ひとつひとつのことわざに対する説明は少ない。また、光村のみ、3学年の教科書に掲載している。

③東京書籍

東書は3学年の下に「慣用句を使おう」、4学年上に「ことわざブックを作ろう」という補助単元を設定している。3学年の「慣用句」では、9個の「慣用句」の意味調べの学習を行っている。さらに具体的なカード作りを紹介し、その後の学習の発展を狙っている。また4学年上の「ことわざ」では、8個のことわざが紹介されている。これらのことわざを調べ、カード作りを行う学習活動は3学年と同様のものである。3学年下と4学年上という比較的近い学習スパンでスパイラルに言葉の調べ学習を定着させようとする意図が見える。

<p>慣用句 (3 学年下)</p> <p>「ねこの手もかりたい」「道草を食う」「馬が合う」「ねこのひたい」「雲をつかむ」「かみなりが落ちる」「うり二つ」「頭をひねる」「のどから手が出る」</p> <p>ことわざ (4 学年上)</p> <p>「さるも木から落ちる」「あぶはち取らず」「石の上にも三年」「ちりも積もれば山となる」「良薬は口に苦し」「急がば回れ」「転ばぬ先のつえ」「善は急げ」</p>

表3 東京書籍で扱われている慣用句・ことわざ一覧

中学校の教科書では「伝統文化に触れる」という大単元を設定し、「古典の世界」「伊曾保物語」「竹取物語」とあわせて「矛盾」が紹介されている。「矛盾」を3ページで扱っているため、漢文の読み方とともに、内容理解を図っている。

④教育出版

同じく教出も2学年にまたがって扱っている。教出は3学年下において「日本の文化に親しもうことわざ・慣用句」という単元を設定している。文章の量も見開き3ページと充実している。まず

6個のことわざが紹介され、さらにその意味も解説されている。その後、「ほかのことわざについても調べてみましょう」と、発展学習がうながされている。「慣用句」は「ほね」に関するものが4個が紹介され、さらに「頭」や「むね」など体の一部を使った慣用句、さらに同じ言葉を扱った慣用句とわかりやすく紹介している。また12個の慣用句を紹介した後に慣用句カードの実際が掲載され、その後の学習の見通しを持たせている。同じく4学年の下でも「日本の文化に親しもう故事成語」の単元を設定し、故事成語の意味や成り立ちが豊富なイラストとお話の構成で紹介されている。さらに5個の故事成語の成り立ちや意味を調べるような学習が組織されている。

<p>ことわざ・慣用句 (3 学年下)</p> <p>「さるも木から落ちる」「かっぱの川流れ」「弘法にも筆の誤り」「上手の手から水がもれる」「善は急げ」「急がば回れ」</p> <p>「慣用句」 (3 学年下)</p> <p>「ほねがおれる」「ほね身をけずる」「ほねをおしむ」「ほね身にこたえる」「頭が上がらない」「頭をかかえる」「頭をひねる」「むねがいたむ」「むねがおどる」「むねがいっぱいになる」「馬が合う」「つるのひと声」「竹をわったよう」「水をさす」「水に流す」「水をえた魚」</p> <p>故事成語 (4 学年下)</p> <p>「五十歩百歩」「漁夫の利」「蛇足」「矛盾」「背水の陣」「推敲」「杞憂」「他山の石」「助長」「守株」「朝三暮四」「蛍雪の功」</p>
--

表4 教出で扱われていることわざ・慣用句・故事成語の一覧

中学校の教科書では、「古典と出会う」という大単元の中で中単元として「故事成語－中国の名言－」が設定され、4ページにわたって「矛盾」

が紹介されている。そこでは送り仮名のつけ方や
返り点の打ち方など漢文を読みとる技法とともに
紹介されている

⑤学校図書

最後に学図であるが、学図も3学年下と4学年
下に見開き1ページのコラム的な扱いで掲載して
いる。ただ学図の場合は、「ろくろくびが首を長く
する」「首を長くして帰りを待つ」の2文が掲
載され、どちらが慣用句かということ調べる活
動を取り入れている。児童が調べることに対する
意味を他の教科書に比べ、より持たせているこ
とがわかる。さらに「ねこ」「かた」「きつね」「頭」
「鼻」のつく慣用句をグループで集め紹介する学
習を組織している。集団の学びという視点から慣
用句を扱っていることがわかる。4学年では「こ
とわざ・故事成語・四字熟語」というコラム的な
見開き2ページの扱いでそれぞれ紹介している。
学図の特色はただのことわざの紹介と調べ学習で
はなく、4学年では「三人寄れば文殊のちえ」と「船
頭多くして船山に登る」と正反対のことわざを紹
介し、多面的なもの見方考え方を育てよう配
慮されている。さらに外国からきたことわざとし
て「一を聞いて十を知る」「大山鳴動しねずみ一
びき」など世界の言語文化を意識させるような教
材の提示も行っている。またいろはかるたの例と
して「犬も歩けばぼうにあたる」が掲載され、我
が国の言語文化としてのことわざの位置付けをは
かっている。最後に調べ学習として8個の意味を
調べるような学習が展開される。また故事成語で
は、「ドレスには、フリルの上にリボンも付けて
みたよ」「うーん、これは蛇足でないのかな」とい
った会話文の形式で紹介され、実生活での活用を意
識した教材となっている。さらに5個の故事成語
について調べ、同じような会話文を作成する学習
を提示している。

慣用句 (3 学年下)

「顔から火が出る」「首を長くする」「足が出る」
「道草を食う」「うでを上げる」「ねこ」「かた」
「きつね」「頭」「鼻」のつく慣用句をグル
ープで集める

ことわざ (4 学年下)

「三人寄れば文殊のちえ」「船頭多くして船山
に登る」「一を聞いて十を知る」「大山鳴動し
ねずみ一びき」「犬も歩けばぼうにあたる」「石
の上にも三年」「急がば回れ」「馬の耳に念仏」
「ねこに小判」「泣きつっらにはち」「花より
だんご」「毒をくらわば皿まで」「ちりも積も
れば山となる」

故事成語 (4 学年下)

「蛇足」「蛭雪の功」「五十歩百歩」「漁夫の利」
「温故知新」

表5 学図で扱われている慣用句・ことわざ・故事成語の一覧

中学校では「故事成語」という中単元が設定さ
れ「五十歩百歩」と「矛盾」が物語として紹介さ
れている。終末には「漢文の訓読」という時間を
設け、訓読法にも学習できるよう配慮されている。
7ページにわたって掲載されており、量的にも一
番充実している。

3 各教科書の傾向から見える問題点

(1) 学ぶ時期の問題点

まず、各教科書の傾向として、小学校では3学
年の下の教科書、すなわち、後半に単元を設定し
ていることがわかる。これは3年間で国語の学習
にも慣れ、言葉について自主的に調べてみよう
と考える時期を3学年の後半と考えている姿勢の表
れであろう。確かにこの時期の児童は、教師の肌
感覚として興味を示した事象について驚くほど詳

細かつ大量に調べる傾向がある。ただし、これは教師側に児童の関心高める手立てが必要であり、その手立ての中心に位置するものが主に教科用図書であることを考えると、故事成語等に関する課題もすけて見えてくる。あまりにも学習量が不足するのである。さらに中学校では4社が1年に設定されている。これは、漢文の入門指導として故事成語を位置づけている事に起因している。故事成語を用いて、漢文への興味関心を高め、訓読法や書き下し文の読み方を指導しているのである。ただ『中学校学習指導要領解説 国語編』には、第1学年の「伝統的な言語文化に関する事項」において、「小学校から慣れ親しんだ様々な古典と結びつけることで」という箇所がある。このことから小学校で学んだ故事成語に限定されることになるのである。

(2) 学ぶ量の問題点

このように見ていくと、小学校で学んだ慣用句やことわざ、故事成語が再び中学校で出てくる傾向が強くなる。確かに5社のうち、4社で「矛盾」が扱われ、小学校との重複が見られるのである。小学校では、各社に出てくる頻度の多い故事成語として「推敲」「矛盾」「五十歩百歩」などがある。ことわざでは「犬も歩けば棒に当たる」「急がば回れ」など、慣用句では「道草を食う」がある。これは「小学校学習指導要領解説 国語編」に例として出てくるものを教科書会社が採用したと見ることができるであろう。特に故事成語に関しては、ほとんどの教科書が同様のものを扱っている。さらにことわざや慣用句では児童の生活に根ざしたもの、例えば「下校途中で道草を食わないように」といった指導がなされることを想定したものであろう。生活の中で生きて働く言葉の力や言語文化の高まりを要請していることがわかる。ただその文化は広がりを持つものではなく、小学校中学校9年間にわたって非常に限定的な、小規模な言語文化と言うことになる。

(3) 教科書会社の問題点

次に教科書会社が選定したことわざ・慣用句、故事成語から見える課題について考えてみたい。小学校では比較的多くのことわざ・慣用句・故事成語を紹介している会社のもは、その説明が少なく、紹介だけにとどまっている傾向がある。少ない数のことわざ・慣用句・故事成語を扱った教科書会社は、多くの量をその説明や解説につぎ込んでいることが分かる。すなわち、多くの言葉を紹介しているところはページ数の関係で紹介のみにとどまり、児童のその後の発展学習に期待していることが分かる。また、少ない言葉の会社は、その解説に多くの量を割き、児童の知識を深め、発展学習の意識を高めようとしているのである。ただし、どちらも指導計画には、こうした発展学習の時間は設けられていない。教科書で関心や意欲を高めた後、しっかり時間や場を設定して故事成語やことわざ、慣用句にたっぷりと触れる機会を設けなければならない。その点を教科書では見落とされている。教師側に強い意識と指導力が求めているのである。

また、教科書会社で扱うことわざ・慣用句、故事成語に関しては、先に見たように学習指導要領の解説に紹介されたものに非常に強い影響を受けることが分かる。どの会社においても検討を深く加えられたような跡はあまり見られない。そのため、扱われることわざ・慣用句、故事成語がどの教科書においても似たようなものになってしまう。さらに隠語や差別的な内容の疑いが少しでもあると、どうしても敬遠される傾向が生じるのであろう。今日の人権意識に照らして考えればそれは当然の帰結といえるのかもしれない。ただ、そうしたものを総括して言語文化と言えるのであり、この点に関してはさらに深い洞察が求められよう。

さらに、各社の扱いに差が見られることも課題の一つである。確かに、各社の教材の示し方がそのまま、各教科書会社の特色となっていることも

理解はできる。ただ今後の児童の言語生活を考えた場合、最低限これだけのことわざや慣用句、故事成語に関して理解しておくものを示しておく必要があるのではないだろうか。また児童の調べ学習に期待することは否定できないが、すべて丸投げではやはり問題があるだろう。会社によっては「ことわざブックを作ろう」と設定しているところもあれば、単なる紹介で終えている教科書もあり、使用している教科書で知識や発見に差が出てくる。イラストや物語を多くの分量用いて説明している教科書もある一方で、見開き1ページに多くのことわざ・慣用句を詰め込み、児童の調べる学習に期待するものもあった。また意味が正反対のことわざや穴埋め、文章で使う場合の正誤、体や動物などをつかってグループ分けを行うなど、創意工夫も見られた。ただ、これだけ活動が異なれば、学力保証の面からもいくつかの懸念が浮かび上がってくるのである。

(4) ことわざ・慣用句が持つ問題点

さらにそもそもことわざと慣用句の明確な線引きが存在しない。『小学校学習指導要領解説 国語編』では、「ことわざは生活経験などにおいてありがちなことを述べたり、教訓を述べたりするものである。(中略) 慣用句は二つ以上の語が結びついて元の意味とは違った特定の意味を表すものである」としている。この定義を見ても、ことわざに関しては非常に曖昧な印象を受ける。多くの場合、ことわざは一文で言い表すことができるのに対し、慣用句は文の一部で使用される傾向がある。ことわざは主述を持っているのである。単文指導などで慣用句がよく用いられるのもそのためであろう。ただ「縁の下の力持ち」などはことわざ、慣用句どちらの辞書にも載っており、どこに分類されるのかが明確でない。そのため、教科書などで扱われることはないのである。こうして考えると、その定義自体の問題で、削られてしまう語句も多数に上ると考えられるのである。

4 今後の指導と改善のために

これまで見てきたように、ことわざ・慣用句・故事成語に関しては、主たる教材である教科書において、いくつかの問題点があることが分かった。すなわち児童の生活における言語文化の豊かさを目指しながら、ことわざ・慣用句・故事成語は小学校中学年で学ぶと中学校の一つの学年で学習して終えてしまう。また、その分量も決して大きいと言えるものではなく、多くの教科書で2ページから3ページ程度である。

そこで選択される言葉も多くの制約が散見され、学習指導要領解説で紹介されたものに強い影響を受けていることが分かった。このような制約のある言葉から抽出されたものを、中学校でも繰り返し学ぶ傾向が見られ、多く場合、語彙の広がりや新たな発見につながるものではないのである。

また故事成語は中国の故事に由来している。漢語独特の言い回しや文辞は、時代を超えて我が国の言語文化や道徳観に色濃く反映されている。こうした故事成語は遠藤(1973)の次の言葉に集約されている。少々長いが引用してみたい。「単に修辞や言論のあやとして国語表現を豊かにし、言語生活に味わいを添えるという役割を果たすことにとどまりません。すでにそれは日本語の血肉と化して思考の基底に融合し、あるものは伝統的な教訓、処世の知恵として長く人々の心情を培ってきました。そして人々はその心に心理の機微や論理の機知を見だし、人間の魂の郷愁を探り、あるいは情愛や道徳への回帰にいざなわれ、既成の概念を跳躍する非常の直感に感動するのです」

この文言にあるように、凝縮された文化としてことわざ・慣用句・故事成語に向き合う必要がある。慣用句にしても、おなじようなものが海外の言語文化として伝わっており、そうした共通点から人類としての視点や考え方を得ることもできるであろう。

このように言語文化としてことわざ・慣用句・

故事成語を捉えた場合、現在の学校教育の中では質・量とも絶対的に不足していることが明らかとなった。今後の指導を考える際、こうした不足をどこで克服していくかという視点を持つことが重要となる。そのためにはこうした各社の特徴を的確に把握し、教科書を使用する以外の場でどこまでことわざ、慣用句、故事成語に触れる機会を持つかが指導のポイントである。児童の豊かな言語生活を実現するためにも教師側の指導や考え方に待つ部分は大きいといえる。

参考・引用文献

- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 国語編」
- 東京書籍（2015）「新編 新しい国語」
- 教育出版（2015）「ひろがる言葉 小学国語」
- 学校図書（2015）「みんなと学ぶ 小学校 国語」
- 光村図書（2015）「国語」
- 三省堂（2015）「小学生の国語」
- 遠藤哲夫（1973）「故事成語成句辞典」明治書院
- 半田淳子（2012）「学習指導要領の改訂と小中学校の国語教科書が抱える課題」明治図書